

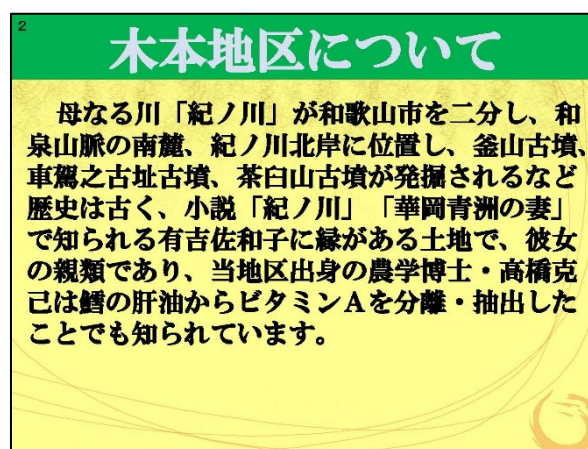
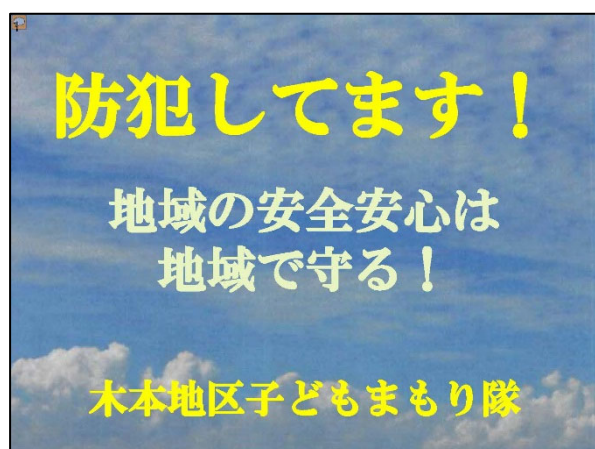
木本地区子どもまもり隊（和歌山県）

皆さん、こんにちは。私たちは和歌山市木本地区子どもまもり隊です。私は、木本地区連合自治会長であり、子どもまもり隊の隊長の豊浦幸三でございます。ただいまから、和歌山市子どもまもり隊の活動内容などについて発表させていただきます。



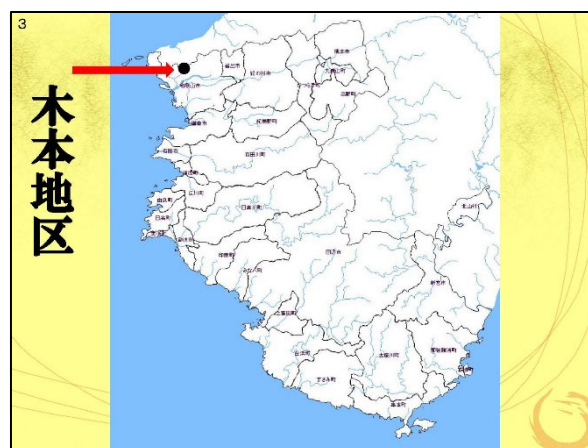
活動地域

まず、私たちが活動する木本地区の概要について、簡単に御説明いたします。木本地区は母なる川、紀の川が和歌山市を二分し、和泉山脈の南麓、紀の川北岸に位置し、釜山古墳、車駕之古址古墳、茶臼山古墳が発掘されるなど歴史は古く、約 1300 年前に奈良の大安寺によって開拓され、その後、奈良東大寺の寺領となつたと記録にございます。また、小説「紀ノ川」や「華岡青洲の妻」で知られる有吉佐和子に縁がある土地で、彼女の親類でもあり、当地区出身の農学博士、高橋克己はタラの肝油からビタミンAを分離抽出したことで知られています。



次に、これは紀伊半島の先端部に位置する和歌山全体の地図で、一番下のところが本州最南端の串本でございます。赤く矢印の付いたところが私どもの木本地区で、この地図のすぐ上が大阪府との府県境であり、県境の峠を越しますと関西国際空港を間近に見ることができます。

次に、これは先ほどの地図を拡大したものであり、和歌山市を二分する紀の川の西側、河西地域の地図ですが、丸く囲んでいるところが木本地区子どもまもり隊の活動範



囲です。東西約2km、南北4km 程度の面積です。紀の川の右岸部大半が海拔2、3mの平地で、一部和泉山脈の丘陵地にかかっています。地区内及び周辺には子供たちが通う、次のような教育機関や公共施設がございます。保育園が認定こども園を入れて3園あります。小学校は3校。いずれも児童数が 500 人前後の中規模校です。中学校は2校、高等学校は1校。そのほか、和歌山県警察学校、和歌山労災病院などがあり、約 7400 世帯、1万 7000 人が生活しています。和歌山市は、全部で 42 地区ありますが、人口から言いますと5番目に多いマンモス地区です。また、近くには日本製鉄和歌山製鉄所などがあり、交通量も多く、通勤と通学時間帯が重なることから、毎日緊張感をもって対応しているところです。



5 地区内には、教育機関や公共施設が

保育園	2園
認定こども園	1園
小学校	3校
中学校	2校
高等学校	1校

その他にも、警察学校や和歌山労災病院があり、

**約 7,400世帯
約17,500人
が暮らしています。**

団体概要

次に、木本地区子どもまもり隊発足の経緯を申しますと、今から十五、六年前、学童が犠牲になる事件が全国各地で発生していました。「地域の子供たちを守ろう」という機運が自然発生的に高まりました。地区連合自治会が中心となって、子供の安全を守るために各種団体代表者を交え、協議会を設置し、組織の立ち上げを目指しました。賛否両論ございまして、喧々諤々の議論の末、結果として全体の合意には至らず、連合自治会としての取組を断念せざるを得ませんでした。しかし、連合自治会参加 19 自治会のうち、10 の自治会の自主的な取組として、平成 18 年2月に先行いたしまして、総勢 550 名の隊員でまもり隊を発足いたしました。

それから 13 年。特に最近の児童虐待や殺傷事件の発生、更には、子育てを支援するという社会的な追い風の中、昨年度末には 19 自治会のうち、16 の自治会にまもり隊が組織されました。同時に連合自治会として念願

**6 木本地区子どもまもり隊
発足の経緯**

(1) 結成は平成 18 年 2 月
**「地域の子どもは地域の宝であり
地域で守る」をモットーに連合自治会と和歌山北警察署のご支援により、隊員数 550 名で発足。**

の子どもまもり隊の発足を確認。平成 30 年6月に隊員 300 名をもって再スタートしたところでございます。

活動内容

次に、活動の概要ですが、まず、登下校時の見守り活動については、天候の良し悪しにかかわらず、登下校時は全て実施するようにしています。日々の計画につきましては、学期ごとの下校予定時間表に基づき、その時間に合わせて通学路要所に要員を配置。児童に言葉を掛けて、迎えています。要員の配置は組織、時間によって様々であります。毎日参加する人、1日おきに参加する人、1週間に1回程度参加する、あるいは2週間に1回程度参加する。こう

いう日時を決めている定例型と、日時は決めていないが参加できるときに自由に参加する自由型がございます。グループ編成も1か所数人の場合、2人1組又は単独行動と様々です。今後は取組内容の平準化と一層の充実を図ってまいりたいと思っています。

一方、学校側も様々な工夫をしまして、スライドの上段にある写真は、小学校における不審者侵入訓練の一コマです。教職員が刺股で必死に応戦していますが、教職員の真剣さが伝わってまいります。スライド下段の写真は、学校行事への参加の一コマです。また、学校自身に地域ぐるみで参加する学校運営協議会にも積極的に参画をし、様々な意見を反映しているところです。

7

(2) 構成員 現在 300 名
平均年齢 70 歳

(3) 構成団体等
木本地区老人会
地域安全推進員
自治会役員
各学校校長とPTA

8

活動の概要

(1) 登下校時の見守り活動

小学児童の登下校時における交通事故防止や連れ去り、声かけ事案等、子どもが被害者となる犯罪の未然防止のため、小学生の登下校時、通学路の要所に立って児童に挨拶運動を行うとともに、青パト2台を運用して広範囲に子ども見守りパトロールを展開している。

9

(2) 小学校における不審者侵入訓練への参加

(3) 小学校行事への参加



活動の成果として、おかげさまで活動開始以来 13 年間、登下校時における子供の大きな交通事故や連れ去り等の事件は発生していません。不審者情報等への機敏な対応など、警察学校との緊密な連携が犯罪防止につながり、このような結果となっているものと思われます。まもり隊がどこまで役に立っているかは分かりませんが、子供たちから刺激を受け、元気をもらって、挨拶や短い会話の中から気持ちの通じ合いや、相互の絆が育まれていることは何物にも代えがたく、隊員の充実感とやりがいになっています。子供たちのいる限り、まもり隊活動の継続を願っているところです。

次に、まもり隊活動の継続について、活動日の割当て等については先ほど申しましたので割愛いたしますが、まもり隊活動を継続するためにはいろいろな方法や工夫が必要です。日時の設定から班編成、活動頻度、また使命感が強過ぎても、無理が生じて長続きしません。隊員個々の過度の負担にならぬよう、基本は隊員一人一人の自分ファーストです。図にもありますように、青パトによる活動については青パト2台を有効に活用しまして、緊急時や遠隔地対応、また、地区内のホットスポットには青パトを停めて警戒するなど、機動力を発揮しているところです。

活動経費ですが、隊員個々へのものについては、それぞれ所属の自治会で慰労会や懇親会などでねぎらっているようです。連合自治会としては、年間 30 万円程度の予算を計上して、隊員の装備品などの補充、青パトの諸経費などに有効に活用しています。

次に、これはまもり隊の活動風景ですが、この写真では、まもり隊の隊員が押しボタン式信号機の操作と横断歩道の誘導を行っています。いわゆる手助けをしていますけれども、もう一つの方法として、信号機の操作や横断歩道の誘導など、隊員は一切手出しをせず、ただ見守るだけという方法がございます。今のところ、具体的な方法等については現場に任せており、詳細についての指導までは行っていません。

次に、この写真は青パト活動中のものです。地域内のホットスポットに青パトを停めて、子供たちの行き帰りを

10

活動の成果

活動開始以来 13 年間、登下校時における子供の大きな交通事故や、連れ去り等の事件は発生していません。

11

木本地区子どもまもり隊の活動を継続させる方法や工夫

- ★活動日の割当て
- ★青パトによる活動
- ★活動経費の捻出



待っています。

次に、先ほどはまもり隊活動を継続させることについて述べましたが、継続するためには組織を支える隊員がいなくては始まりません。先ほども述べましたとおり、13 年前に 550 名でスタートしたまもり隊も、組織数が 10 から 16 へと大幅に増えたにもかかわらず、逆に隊員数は 300 名程度まで激減しています。現場で見守り活動をしていると「いつもありがとうございます」「御苦労様です」と感謝や労いの言葉を掛けていただく方と、一方では「金にもならないのに何

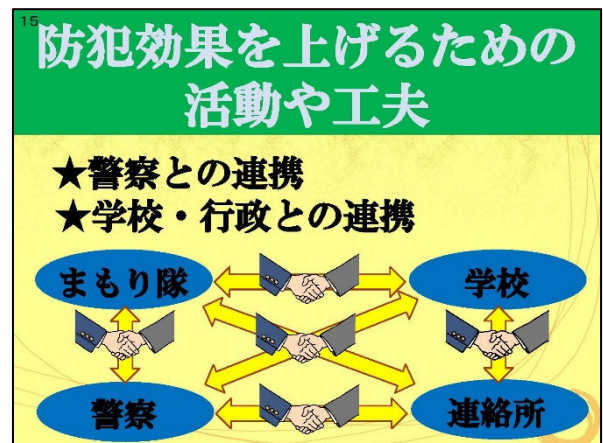
をしているのか」と蔑みの目で通り過ぎる人の2通りがございます。ありがたいことに、温かい言葉を掛けてくれる方が徐々に増えつつあることは、大きな励みになっています。押し売りはできませんが、広い意味で社会貢献を理解するとともに、一人でも多くの方が参加、協力していただくことを願っているところです。



14 木本地区子どもまもり隊の構成員を拡大させる方法や工夫

連合自治会の会長会議の場において、各会長に対して子どもまもり隊員の獲得を呼びかけたり、木本地区の広報紙により隊員募集を呼びかけている。

発足時は550名であった隊員は、高齢化が進み、後継者の獲得が思うように進まず、現在約300名にまで減少している。



また、防犯効果を上げる工夫として、せつかくの取組も効果がなくては何ともなりません。より大きな成果を上げるには、お互いの組織が連携をとり、情報を共有することは大切です。次にもありますように、学校、警察、まもり隊、そして行政の出先機関である連絡所が常に連携を図り、より早く、より正確な情報の下、事故や犯罪を未然に防がなくてはなりません。また、不審者情報が入りますと、学校は急遽、保護者に連絡、集団下校対策をとり、まもり隊もすぐさまその対応に入りますが、最初の情報は入るものの、その後の情報が全く入ってこない場合がございます。発信した情報は、その経過、結果を報告していただくことは当然のことでありまして、私たちも情報の取組については、きっちりとしていかなければいけないと思っていますところです。

その他の特徴として、一つ目は児童との交流です。見守り活動を通じて、心の通じ合いはこれまでも述べてま

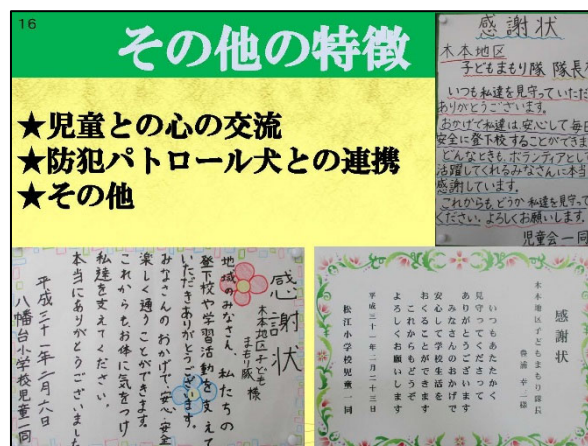
いりましたが、毎年各学校で児童主催の「感謝の集い」や、「ありがとうフェスティバル」など、隊員に対する感謝の意を込めた演劇や歌の発表会があります。この写真は、児童の代表からまもり隊の隊員に送られた感謝状です。児童との交流を楽しみに、多くの隊員や保護者が参加し、賑わいます。児童の心のこもった歌や演劇は隊員たちの胸に響き、和やかな雰囲気の下、新たな意欲と勇気を与えてくれます。

二つ目の特徴は、防犯パトロール犬との連携、いわゆる「ながらパトロール」の実施です。木本地区では平成 27 年 8 月に、犬の散歩をしながら子供見守り活動を行う、防犯パトロール犬に参加いたしました。愛犬家の皆さんにも子供見守り活動に参加していただいています。木本地区では現在、26 頭の防犯パトロール犬が活動し、和歌山市全体では約 490 頭が活動に参加しています。この写真にありますように、黄色いバンダナと手提げかばんが配られ、犬の散歩をしながらの「ながらパトロール」の礎となっています。

三つ目は他地区との交流です。この写真は、松江小学校のありがとう集會に隣接する松江地区お帰りパトロール隊と共に招かれ、児童から感謝状を贈られている光景です。見守り活動では先輩格に当たる松江地区と常に連携を図り、切磋琢磨するとともに、大変珍しいことですが、年に1回、地区同士の交流会を開催し、両地区の隊員をはじめ、行政、学校、警察、企業など、総勢約 150 名にもおよぶ多くの人が集い、情報交換をすると共に親睦を深めています。

課題の解決に向けた取組方策

私たちの活動は、単に子供たちの安全・安心のためだけでなく、地域におけるあらゆる犯罪の大きな抑止力になっていると言われています。現在の日本社会は、超高齢化と人口減少を要因とする負の連鎖が始まっていると言われています。私たちの地域も例外ではなく、先行きの不安が募る中、かつてのような人間関係が失われ、危うさが目立つ日常生活において、このような活動が安全・安心な暮らしに少しでも役立てればという思いで取り組



んでいます。また、本年5月、神奈川県川崎市でスクールバスを待つ児童らが殺傷された事件は、子供たちを守るための安全対策がいかに難しいかを改めて思い知らされました。私ども、子どもまもり隊など、地域や市民防犯の限界を感じさせる事件でしたが、しかし、これまでの取組が全て無駄であったとは思っていません。子どもまもり隊という多くの人の目があることや、地域ぐるみで犯罪を防ぐという気概をアピールすることで、犯罪者が犯行を思いとどまるケースはたくさんあると思います。子供だけが孤立するような環境を作らない取組は引き続き重要です。今後も未来ある子供たちを事件、事故から守り、安全で住みよい街づくりに取り組んでまいりたいと思います。

終わりになりますが、御列席の皆様の益々の御活躍と御健勝を祈念いたしまして、私どもの発表を終わらせていただきます。御清聴ありがとうございました。

